

古川 知明

(埋蔵文化財センター所長)

1 はじめに

飛騨南部の下呂市湯ヶ峰を原産地とするガラス質の流紋岩石材は「下呂石」と呼ばれ、旧石器時代から縄文時代の石器の石材として周辺に搬出された。特に湯ヶ峰から 80~120km にある富山平野への搬入量が多いことが近年判明している。本稿では、日本海域における下呂石の分布状況を把握し、そこから判明する流通の実態を解明することを目的とする。

2 研究史

下呂石の日本海域への搬入状況の研究は、1995 年高山考古学会石原哲彌を端緒とし〔石原 1995〕、2003 年第 1 回下呂石シンポジウムで飛騨考古学会岩田修が踏査・文献により資料を蓄積した。この時点における新潟・富山・石川の分布は 9 遺跡であった〔岩田 2003〕。爾後富山で 4 遺跡が追加された〔岩田 2005〕

2011 年、第 4 回下呂石シンポジウムにおいて、古川知明が福井東部・石川・富山・長野北部・新潟西部の出土集集成を行い、基本情報と課題を整理した〔古川 2011a〕。なお、このシンポジウム以前における詳細な研究史は前掲報告を参照されたい。爾後旧石器～縄文草創期における同地域の搬入状況について分析した〔古川 2011b〕。

2013 年、第 2 回石材のつどいにおいて、古川は日本海域における下呂石の流通について、第 4 回下呂石シンポ以後増加した新資料を加えて報告した。この報告では、2011 年報告より分布域の拡大・原石形態の追加について追加修正を行なった〔古川 2013〕。

3 日本海域における下呂石の流通状況

(1) 遺跡数と時代別推移

日本海域とした対象範囲は、新潟・富山・石川・福井の 4 県と長野北部である。

この地域において、下呂石の使用は総数 174 遺跡において確認された。県別では、福井 20、石川 33、富山 110、新潟 7、長野 5 遺跡である。時代別では、旧石器時代～縄文草創期 31、縄文時代（早～晩）114、弥生時代 29 である。詳細にみると、旧石器時代～縄文草創期は新潟 2・富山 25・長野 4、縄文時代（早～晩）は新潟 4・富山 74・石川 23・福井 12・長野 1、弥生時代は、新潟 1・富山 10・石川 10・福井 8 である。なお新潟県佐渡島での存在は確認されなかった

(2) 分布域

全時代の分布域は、湯ヶ峰からの距離で、西へ 130km（若狭地域）～北へ 170km（能登七尾湾北岸）～北東へ 270km（阿賀野川上流付近）圏内である。

時代別に見ると、旧石器～縄文草創期は 80~110km 離れた富山平野に多く、次いで北東に 120km 離れた野尻湖から千曲川・信濃川上流域に多い。北東 270km まで広がり、これが全時代を通じ最遠である。富山以



図1 旧石器時代～縄文草創期の下呂石出土遺跡分布図

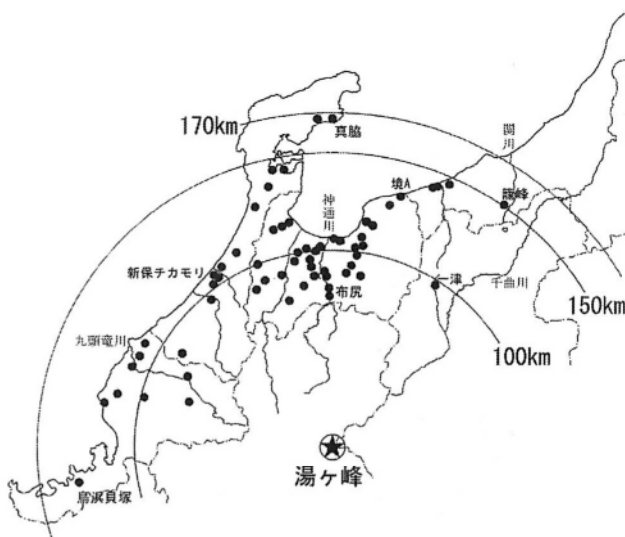


図2 縄文時代の下呂石出土遺跡分布図
〔古川 2011a〕に加筆修正

西には及ばない(図1)。

縄文時代(早～晩)は西へ130km(若狭・鳥浜貝塚)～北へ170km(能登七尾湾北岸)～北東へ150km(新潟西部)であり、富山平野に最も集中している(図2)。

弥生時代は富山西部以西に広く分布し、西は110kmに広がる。北東はこの分布域から離れて新潟西部に1遺跡のみである(図3)。

(3)年代的変遷

時代毎の搬入状況を見ると、最も古い搬入は長野北部の信濃川上流野尻湖遺跡群で、AT以前の台形石器段階である〔中村2007〕。富山平野では瀬戸内系石器群期の富山県南砺市南原C遺跡〔麻柄2006〕を端緒とし、続く小形ナイフ形石器期に神通川流域に広がる。石器のみの遺跡が多いが、剥片を伴う製作遺跡も存在する。

縄文草創期には富山以東に分布が見られ、北東270kmの小瀬ヶ沢洞窟〔及川2010〕が最遠である。

縄文時代早期以降には、前期後半・中期・晩期に遺跡数が増加する。前・中期は富山平野を主体とし、特に前期中～後葉が最も物量が多い戸みられる。後・晩期には新潟西部から福井東部に散漫に分布する。

弥生時代は中・後期にピークがあり、富山西部から福井東部にやや散漫に分布する。

(4)原石搬入形態

湯ヶ峰以北における原石の流通は拳大程度の垂角礫によるものが主体である。岐阜・富山県内の各製作遺跡における原石表皮は、礫稜部の衝撃痕や摩滅が少ないものが多く、湯ヶ峰原産地あるいはそこからの崩落品を採取したことを示しており、河川転石までに至っていない角礫あるいは垂角礫を示している。

このような主体的状況とは別に、高山市(丹生川)上上野遺跡の5.25kgの大形石核の存在が従来から知られ〔小嶋ほか1999〕、近年神通峡の富山市布尻遺跡でも2.4kgの大形石核が確認された〔古川2010〕。湯ヶ峰と富山平野を結ぶルート上において、通常形態とは異なる、持ち運びに苦勞するであろう大型原石という特殊な原石流通形態が存在したことが判明した。明確な計測データはないが、通常流通する原石は拳大(150～250g)と推定され、これらと比較すると布尻遺跡の石核で9.5倍以上、上上野遺跡の石核で21倍以上となり、かなりの相違がある。

一方、富山県西部において、1点のみであるが原産地以南で採集可能な円礫原石が確認された。氷見市上久津呂中屋遺跡〔富山県文化振興財団2012〕において検出された縄文早期末から前期の楔形石器(図4)は、著しく摩滅し白色化した礫表皮が部分的に残存する円礫で、河川礫である。石器は円礫を縦に半割しており、復元すると長さ7～8cm、幅4～5cmとなる。このような形態を示す河川礫は、これまでの研究成果〔沢田2001・中村2007ほか〕によれば、飛騨川と木曽川の合流点以南、原産地から約15～40km以上南に離れた河川敷において採集可能とされているものである。この形態の原石の存在は、富山平野への搬入形態に2ルート存在したことを示唆する。

(5)石器器種別にみる動向

縄文早期以降の器種は石鏃を主体とし、次に石匙・石錐が多い。遺跡毎に出現器種は異なる。中～晩期の富山県境A遺跡では石鏃・石錐があり石匙には見えない。各器種における出現率は約6%である。

石核・剥片の存在等により石器製作を裏付ける遺跡は、旧石器時代から縄文草創期においては少なく、縄文時代早期以降では半数近くがあり、相対的に多くなる。弥生時代では中核的遺跡のみで製作が認められる。全体を通じ、完成された石器として搬入されたものが多いと理解される。

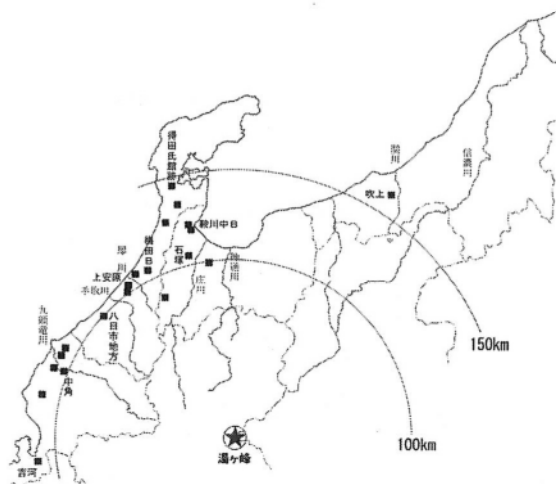


図3 弥生時代の下呂石出土遺跡分布図

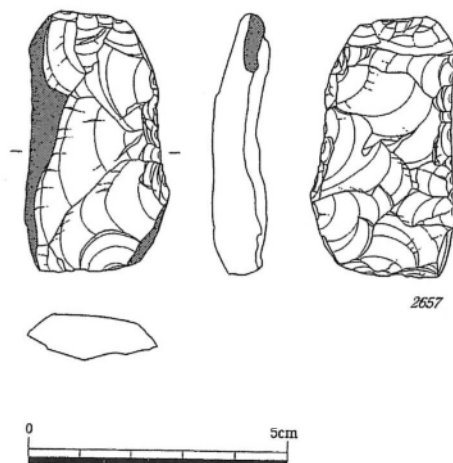


図4 上久津呂中屋遺跡の楔形石器

〔富山県文化振興財団2012〕に網点加筆

よりやや遅れる。

縄文時代には前期後半から中期において、富山平野を中心に搬入量が増加するとともに、分布域が西（若狭）と北（能登）へ最大に広がる。後・晩期には金沢平野に遺跡が増加する。

下呂石使用の終焉は、弥生時代後期頃とみられる。この時期の分布は、能登南部から敦賀湾までの北陸西部に集中し、やや離れた高田平野にわずかに見える。遺跡からの出土数が減り、流通量が減少するとともに、製作遺跡数も減少し、石鏃を主とした製品のみ出土が増える。同様に遠隔地の長野市松原遺跡（弥生後期）では、武器とみられる長大な石鏃に下呂石が認められており、地域圏相互の交流に基づく贈与が推定されている〔町田 2013〕。

6 下呂石流通の動向

日本海域で最も物的に流通したとみられる縄文時代前期後葉は、他の石材においても流通範囲の拡大現象を認めることができる。先述の信州産黒曜岩においては、和田峠原産地群が前期中葉以降供給が増えたことが判明しており、その要因として、石材獲得方法として新たに採掘が開始されたことと連動する可能性が指摘されている〔堤 2002〕。

一方他地域においては、九州姫島産黒曜石では、縄文前期に 10kg 超の大型石核が出現し、製作のセンター的な中継地遺跡が出現するとともに、分布域が拡大することが把握されており〔下森 2004〕、下呂石と類似した状況が認められる。

このように遠隔地石材の流通において、流通範囲の拡大といった現象が縄文前期後葉前後の時期に、希少性のある遠隔地石材のいくつかに共通して認められることは留意される。

なお、湯ヶ峰原産地における原石採取地については、石質の変化から、縄文前期から中期にかけて西側（湯ヶ峰崩れ側）から南東側（乗政川沿い）に移動している可能性があるとしてされている（馬場伸一郎氏のご教示による）。この変化が日本海域への流通にどのような変化をもたらしたかの検証は、今後の課題である。

おわりに

本稿ではあまり触れなかったが、下呂石にはいくつかの類似石材が存在しており〔古川 2011a〕、同定を困難にしている。下呂石を蛍光 X 線分析した結果、まとまった範囲に収まることが明らかとなっているので〔平井ほか 2013〕、今後蛍光 X 線分析が石材同定に有効となることが見込まれる。各地において同定資料が蓄積されることが望まれる。

本稿作成にあたり、次の方々にご教示を得た。記して感謝申し上げたい。

朝田亜紀子、鯨本真友美、岩田 修、堅木宜弘、川添和暁、久々忠義、小島秀彰、小杉 康、島田哲男、田部剛士、堤 隆、中村由克、長屋幸二、馬場伸一郎、麻柄一志、三浦知徳、吉朝則富、下呂石シンポジウム実行委員会、福井県立若狭歴史民俗資料館、公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所（順不同・敬称略）

文献

- 石原哲爾 1995 「飛騨の地理と下呂石の動き（遺稿）」『飛騨と考古学』飛騨考古学会
- 岩田 修 2011 「下呂石シンポジウムを終えて」『どっこいし』99:10-16, 飛騨考古学会
- 岩田 修 2012 「下呂石研究の現状(二) 旧石器～縄文時代草創期の下呂石」『斐太紀』7: 60-74, 飛騨学の会
- 及川 穰 2010 「諏訪湖底管根遺跡と黒曜石原産地をめぐる地域文化の形成過程」『信州黒曜石フォーラム 2010』
- 小嶋準一・吉朝則富 1999 「下呂石石核の巨大資料」『どっこいし』第 62 号 飛騨考古学会
- 沢田伊一郎 2001 「飛騨地方の瀬戸内技法—下呂石原産地の様相と瀬戸内技法のあり方—」『飛騨と考古学—旧石器特集号—』飛騨考古学会
- 下森弘之 2004 「姫島産黒曜石の流通とそのシステム—姫島産黒曜石の分布からの考察—」『黒曜石文化研究』明治大学黒曜石研究センター
- 大工原 豊 2007 「黒曜石交易システム—関東・中部地方の様相—」『縄文時代の考古学 6 ものづくり 道具製作の技術と組織』同成社
- 田部剛士 2011 「下呂石の近畿地方への広がり」『第 4 回下呂石シンポジウム 2011 旅する下呂石—思えば遠くへ行ったもんだ—』下呂石シンポジウム実行委員会
- 堤 隆 2002 「中部高知における黒曜石研究の現状と課題」『黒曜石文化研究』明治大学黒曜石研究センター
- 富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所 2012 『上久津呂中屋遺跡発掘調査報告』
- 中村由克 2007 「下呂石の供給」『縄文時代の考古学 6 ものづくり』同成社
- 平井義敏・藤根久・竹原弘典 2013 「第 3 節 設楽火山岩類起源の玄武岩・安山岩製石器について—根羽石と只持安山岩—」『新修豊田市史』18
- 古川知明 2010 「富山県における下呂石の搬入状況」『越中と美濃を結ぶ考古展 交流のはじまり 旧石器時代～古代 記念講演録』富山県教育委員会埋蔵文化財センター
- 古川知明 2011a 「北陸の下呂石」『第 4 回下呂石シンポジウム 2011 旅する下呂石—思えば遠くへ行ったもんだ—』:19-40
- 古川知明 2011b 「旧石器時代から縄文草創期における下呂石の北陸への搬入」『月刊考古学ジャーナル』610:11-14
- 古川知明 2013 「日本海域における下呂石の流通」『石器石材のついで 第 2 回 シンポジウム「富山の石材と玉髄・碧玉」予稿集』:17-20
- 麻柄一志 2006 『日本海沿岸地域における旧石器時代の研究』雄山閣
- 町田勝則 2013 「石器の生産と流通」『文化の十字路 信州』一般社団法人日本考古学協会 2013 年度長野大会実行委員会